アートを探求

AAC Journal

AICHI ARTS CENTER

by 愛知芸術文化センター

平原綾香とホール・劇場ステージとの向き合い方

平原綾香 *Ayaka Hirahara*

2003年『Jupiter』でデビュー。歌手としてさまざまな賞を受賞し高い評価を受ける他、ドラマやミュージカル、映画の吹き替えなど多方面で活動。23年にデビュー20周年を迎え、同年9月に平原綾香20周年アニバーサリーアルバム「A-ya!」をリリース。

Contents

相国寺展ー金閣・銀閣　鳳凰がみつめた美の歴史
愛知公演について平原綾香インタビュー
自分のナショナリティは何か。栗木義夫
劇場と音楽 ～街とつながるコンサートホール～

© hiroki nishioka

2024年11月10日(日)

平原綾香 Concert Tour 2024-2025
～The Swinging Classics!～

場所／愛知県芸術劇場コンサートホール　時間／17:00～
お問合せ／サンデーフォークプロモーション ☎052-320-9100

詳細は公式サイトで!

2024 AUTUMN
Vol.121

愛知県芸術劇場

INTERVIEW

育まれてきた21年 “ホールさん”、今回もよろしくお願いします。

愛知県芸術劇場は、デビューから21年経った今もお世話になっているホールです。私の喜びも涙も染み込んでいるそんな気がします。

デビュー10年目くらいからでしょうか、ホール（劇場）では“ホールさん“という存在を感じるようになりました。ホールさんは、『オペラ座の怪人』のファントムのような存在です。私が自ら歌おう!と思っても、なかなか思うように歌えないのですけど、「ホールさん、今日はよろしくお願いします」という気持ちで歌うと、ホール・劇場がすごく共鳴してくれる気がします。ホールさんは愛知県芸術劇場や、どこのホールにもいる存在だと思います。

そのような存在を感じられるホールで歌うことが私はとても好きです。コンサートに出演するようになって、いつも口癖のように「ステージの上で暮らしたい」と言ってきました（笑）。ステージが好き過ぎて、どんなに気持ちが折れていても辛くても、ステージに立つと、一度傾いた心をいろいろな力で真ん中にさせてくれる、なりたい自分にさせてくれる場所が私にとってのホールであり、劇場です。これまで本当に紆余曲折ありましたが、それでもなお舞台に立ち続けて、今年21年目を迎えることができました。

21年目のコンサートツアーのタイトルは「The Swinging Classics!」。今からワクワクしますね。swingはジャズの要素、classicは音楽の根源的な意味であったりと、私が大切にしているルーツを改めて表現するコンサートになりそうです。

愛を込めてスタッフの皆さんと創り上げています。生のアートは全然違うので、愛知県民の皆さまぜひ一度コンサートにお越しください。人に会うことやお風呂と一緒で「ちょっとめんどくさいな」と思うときがあるかもしれませんが、実際に足を運んでみると「観てよかった」と、感じることもあるかと思います。同じように、ぜひお風呂と思ってお越しいただけますと幸いです（笑）。

聞き手・編集／愛知県芸術劇場

愛知県美術館

雪舟から応挙、若冲へ 受け継がれる名品――そこに物語があった

相国寺（しょうこくじ）は、室町幕府3代将軍・足利義満（あしかがよしみつ）（1358～1408）が永徳2年（1382）に発願（ほつがん）し、京五山禅林の最大門派であった夢窓派の祖・夢窓疎石（むそうそせき）（1275～1351）を勧請開山（かんじょうかいざん）に迎え、高弟の春屋妙葩（しゅんおくみょうは）（1311～1388）を実質開山とし創建された禅宗の古刹（こさつ）です。今も京都の地、御所の北側にその大寺の姿を誇り、金閣寺、銀閣寺の通称で名高い鹿苑寺（ろくおんじ）、慈照寺（じしょう）を擁する臨済宗相国寺派の大本山です。

時代を通じ、相国寺は芸術家を育て、名作の誕生を導いてきました。室町幕府の御用絵師とされる相国寺の画僧・如拙（じょせつ）と周文（しゅうぶん）。室町水墨画の巨匠と称される雪舟（せっしゅう）。江戸時代に流派の地位を確立した狩野探幽（かのうたんゆう）。そして奇想の画家・伊藤若冲（いとうじゃくちゅう）、原在中（はらざいちゅう）、そして円山応挙（まるやまおうきょ）…。中世に規範を得た相国寺文化圏の美の営みは、近世、近代、現代へと時をつなぎ、相国寺、鹿苑寺、慈照寺が所有する美術品は相国寺境内にある承天閣美術館（じょうてんかくびじゅつかん）で公開されてきました。

本展覧会は、相国寺承天閣美術館開館40周年を機に開催するものです。国宝、重要文化財あわせて45件以上を含む相国寺派の名品を中心に紹介し、相国寺の美の世界をみつめ、未来へ託します。

愛知県美術館

重要文化財 文正《鳴鶴図》元～明時代
14～15世紀 相国寺蔵【前期展示】

2024年10月11日(金)～11月27日(水)

相国寺承天閣美術館開館40周年記念
相国寺展ー金閣・銀閣　鳳凰がみつめた美の歴史

場所／愛知県美術館
時間／10:00～18:00　※金曜～20:00（入館は閉館の各30分前まで）
休館日／毎週月曜日（ただし10月14日[月・祝]、11月4日[月・振休]、
11月25日[月]は開館）、10月15日(火)、11月5日(火)
料金／一般1,800円（1,600円）、高校・大学生1,000円（800円）、中学生以下無料
※（　）内は前売券および20名以上の団体料金
※会期中一部展示替えをします。
前期10月11日(金)～11月4日(月・振休)　後期11月6日(水)～11月27日(水)

お得な平日限定券も

詳細は展覧会公式サイトで!

スタッフのオススメ関連本!

ART LIBRARY

もっと知りたい伊藤若冲　生涯と作品　改訂版
佐藤康宏／著、東京美術、2011年

江戸時代中期に活躍した画家・伊藤若冲の主要作品を紹介した書籍。写真とともに年齢ごとの変遷を辿る構成。関連エピソードや用語解説などコラムも充実。

由良学芸員

鑑賞 note

心を揺さぶり、思考が巡る、その場でしか味わうことのできないもの。 丁寧な言葉で残されたレビューを読み深めて楽しみたい。

劇場

ダンスの先端、思考の深淵 ―NDT2024ツアー

2019年の来日では、劇的なダンスで観客を圧倒したネザーランド・ダンス・シアター（NDT）。今回は趣向を変え、NDT日本初演の5作品から公演ごとに組み合わせを変えたトリプルビルを3都市で上演した。

最も新しい作品は、気鋭の振付デュオ、エイアール&ベハールの『Jakie』（2023）だ。ミニマルな音楽が反復され、ヌーディな衣装の16人が踊り続ける。衣装も振付も性差がなく、力強いユニゾンが微妙なずらしや間欠的なソロによって徐々に変容し、個と集団の新たな姿が露わになる。カリーソ振付『La Ruta』（2022）は、日本のホラーに着想したという、郊外のバス停が舞台のミステリアスな作品。ダンサーは驚くべき身体性で、剣を抜く侍に、衝突事故の被害者に、鳥に、石像に姿を変える。振付家の拠点、ベルギーのシュルレアリスム絵画を思わせる世界観が忘れ難い。『I love you, ghosts』（2022）は、振付家ゲッケのシグネチャーである超高速の震える動きが音楽と切り結び、他者と関係して常に揺れ動く心を視覚化する。ソロからデュオ、トリオへ変化し、ダンサーたちは見事に制御されたムーヴメントを通して目の前の生者―あるいは舞台に棲む亡霊―と対話し、過去の劇場の記憶を蘇らせた。

パイト振付『Solo Echo』（2012）は、過去に日本で上演されたパイト作品（『The Statement』『リヴァイザー』）と異なり、音楽を抽象的なムーヴメントに変換し、情感を立ち上げ、物語を暗示する。チェロソナタ（ブラームス）の抒情的な調べにのせて、純度の高いダンスを雪の降りしきる空間に展開し、人生のうつろいを味わい深く見せた。“テーブルダンス”とも呼ばれる『One Flat Thing, reproduced』（2000）は、巨匠フォーサイスの名作。空間の水平と垂直を強調するテーブルの前後、上下をカラフルな衣装のダンサーが移動し、柔らかく有機的なフォルムとの対照を示す。一見さりげないが緻密に計算された振付を、ダンサーは極めて自然に踊った。

これほど多様なスタイルとテーマを解釈し、踊りこなすNDTダンサーの身体能力とセンスに舞踊の最先端を見た。そして2000年からコロナ禍を経た現在までを網羅した作品選択から、「私たちは現代といかに向き合うのか」という真摯な問いを受け取った。同時代との対話こそ、コンテンポラリーダンスを観る醍醐味なのだ。

岡見さえさん *Sae Okami*
舞踊評論家、共立女子大学准教授。

『Sole Echo』（愛知公演）
© 南部辰雄

NDT（ネザーランド・ダンス・シアター）プレミアム・ジャパン・ツアー2024
2024年6月30日（日）高崎芸術劇場
7月 5日（金）・6日（土）神奈川県民ホール
12日（金）・13日（土）愛知県芸術劇場大ホール

美術館

新たな価値の創造――コスチュームジュエリーの創作と収集

20世紀初頭、ファッションデザイナーのシャネルは「ジュエリーは楽しみの一つであるべきだ」と考えていた。宝石や貴金属なんて富や権力の誇示でしかない、だから新しい時代の女性たちにはもっと気軽に楽しめるものが必要なのだ、と。

本展で紹介された20世紀初頭から後期にいたる「コスチュームジュエリー」は、まさに彼女が思い描いた楽しさに溢れる、いわばイミテーションのジュエリーたちである。カラフルな輝き、意表を突く造形、ユーモラスなモチーフなど独創性に富み、ときにそれらはキッチュでさえある。ガラス、プラスチック、合金といった量産に向く素材を多用して制作されるこれらのジュエリーは、19世紀までの本物志向という常識を軽やかに覆し、20世紀を通して多くのファッションデザイナーやアーティストの創作欲を刺激した。実際、シャネルは1920年代半ばに自社内にコスチュームジュエリーの部門を設立し、わざとらしいまでに大ぶりの模造パールやガラス玉をつけたネックレスなどを制作している。そして本展でも詳しく紹介されたメゾン・グリポワやロベール・ゴッサンスなど個性に富んだメーカーとたびたび協業して人気を博した。

ところで、こうしたコスチュームジュエリーのコレクションは、実のところ世界的に見ても現存数が少ない。一つには素材の劣化のため保存が難しい、という理由がある。そしてもう一つは、その多くが安価な原材料かつ短期間に流通する量産品であるため、適正な評価がなされてこなかった点にある。これは1970年代以降に主流となったプレタポルテ（高級既製服）の収集にも同じことが言えるのだが、とりわけ同時代の作品を瞬時に評価し収集するのは、流行のサイクルが短期的な現代にあっては非常に難しい。そのようななか、本展で展示された質の高い400点以上にもおよぶコスチュームジュエリーは、コレクター小瀧千佐子氏が一個人で約40年のうちに収集したものというのだから驚くほかない。かつてシャネルをはじめとするデザイナーたちが旧来の価値観から脱して新しい価値を創造したように、収集もまた新しい価値と評価を時代に刻む。小瀧氏の膨大なコレクションはそのことを雄弁に語っている。

筒井直子さん *Naoko Tsutsui*
京都服飾文化研究財団キュレーター。専門は19世紀～20世紀のファッションとメディア。京都精華大学、同志社女子大学非常勤講師。

コスチュームジュエリー：美の変革者たち
シャネル、ディオール、スキャパレッリ　小瀧千佐子コレクションより
2024年4月26日（金）～6月30日（日）
場所／愛知県美術館

AACのWEBサイト・SNS・音声メディアでは芸術を気軽に楽しめるコンテンツを配信！
こころのおやつ
AACタイム
by 愛知芸術文化センター
WEBサイトをチェック　aactime.aichi.jp
インスタをフォロー　@aichigeibunaactime
ポッドキャストをきく　愛知芸術文化センターのアートがもっと好きになるラジオ

詳細は美術館公式サイトで！

今秋開催！
第28回アートフィルム・フェスティバル

「アートフィルム・フェスティバル」は、実験映画やビデオ・アート、ドキュメンタリー、フィクションなどのジャンル区分にとらわれず、独自の視点からプログラムを構成する特集上映会です。今回の特集は「オリジナル映像セレクション」。また、愛知芸術文化センター・愛知県美術館オリジナル映像作品最新第32作として完成した吉開菜央監督『まさゆめ』（2024年）を初公開します。

News お知らせ

展示の詳細はこちら！

レオノーラ・キャリントンの絵画《ウルでの狩り》、愛知県美術館が個人から受贈

愛知県美術館は今年3月、レオノーラ・キャリントン（1917-2011 英国／メキシコ）の絵画《ウルでの狩り》（1946年頃 油彩、画布）を愛知県在住の個人から受贈しました。古代メソポタミアの都市国家ウルを舞台にした本作は、拠点を欧州からメキシコに移して活動を始めた時期に描かれました。神話や魔術、古代文明などをイメージの源泉として、自伝とフィクションを混ぜ合わせた独自の物語を紡ぎ出すキャリントンの魅力あふれる一点を、コレクション展でぜひお楽しみください。

もっと知りたいアート専門の図書館
ART LIBRARY
（愛知芸術文化センター1F）

当館では、事典や年鑑といった調べものに役立つ参考図書（レファレンス・ブック）を多く所蔵しています。資料によっては、芸術作品の所蔵情報や、書籍への収録状況を調べることもできる優れものです。

デザイン／神谷直広、髙木若菜（株式会社Rand）
編集／村瀬実希（MAISONETTE Inc.）、Re!na
印刷／長苗印刷

© 愛知県芸術劇場2024　※本誌記事・写真・レイアウトの転載を禁じます。　※本誌に掲載している価格は、原則的に消費税込みの価格です。
※掲載内容は2024年8月16日（金）現在のものです。展覧会・公演の内容を変更、または開催を中止する場合があります。

2024年9月1日号　Vol.121　発行・お問合せ／愛知県芸術劇場（公益財団法人 愛知県文化振興事業団）　052-955-5506　e-mail／mkt@aaf.or.jp（広報グループ）

自分のナショナリティは何か。

栗木義夫

《Glove Stand》

Yoshio Kuriki
栗木義夫

1950年愛知県瀬戸市生まれ、愛知県在住。陶芸家の家系に生まれ、日本大学芸術学部美術科では柳原義達のもとで彫刻に対する思想や表現について学ぶ。79年新制作協会「新制作展」に初出品。81年愛知県立芸術大学大学院彫刻専攻を修了。主に鉄と陶を用いて、曖昧な記憶のようなものを視覚化する彫刻を制作。長年、名古屋市の美術予備校の講師を務める。名古屋芸術大学芸術学部芸術学科美術領域コミュニケーションアートコース特別客員教授。

聞き手／愛知県美術館 主任学芸員　石崎尚　　撮影／千葉亜津子

同じ緊張感を持つ鉄と焼き物を素材に

石崎（以下、石）　愛知県美術館が最近作品を収蔵した作家ということでお話を伺います。《Glove Stand》（2008年）を最初にお借りしたのは、「アイチアートクロニクル 1919-2019」で、栗木さんに何か1点をお願いしたときにご自身が選ばれたものでした。鉄と陶という二つの素材を用いた先駆的な作品です。二つの素材について、どう解釈されていますか。

栗木義夫（以下、栗）《Glove Stand》はいろいろな意味で自分の中に変化が起きたときの作品です。大学では彫刻家として木と石についてマスターする必要がありましたが、どちらも僕には向いていなかったです。単純に一番面白いと思ったのが金属で、その中でも鉄に興味を持ちました。僕が素材として扱う鉄は厚みがあって、重さが200kg近くあるもの。熱伝導溶接で変容して、突然焼きせんべいみたいになるんだよね。不思議とものすごく軽やかに見えてくる。そんな鉄と焼き物は緊張感が同じに見えます。僕の思う緊張感は、ものを部屋に置いたときに、あるべき状態が保たれていること。違和感があるとざわついてしまいます。変なものを置きたくないじゃないですか。そういう意味で鉄と焼き物のマッチングは見事で、この作品ができる3年前くらいから焼き物を素材にし始めました。

石　焼き物を使うというのは、ご自身のルーツに対する研究なんですか。

栗　全然そういうものではなくて。昔、夏休みの宿題で、奈良の大仏に感動して、大仏の形をした焼き物を作って持っていったことはありましたが（笑）。陶芸家の父のアシスタントとして、焼成するための窯の管理を手伝ったのが焼き物に親しむようになったきっかけです。父に早い段階から教え込まれたので、自然と焼き物の世界を理解することができました。「菊練りがうまい」と褒められて、僕にも褒められるものがあると思うとうれしかったですね。徐々に自分で作ったものを自力で焼成できるようになりました。

石　これはなんともいえない丸みを帯びた立体ですね。私は最初、茶碗をひっくり返したようにも見えました。

栗　カーテンを束ねるタッセルからヒントを得ています。この作品を発表した前年くらいから制作台が気になり始めました。制作台って日常に入り込んでいて、ものを置くだけじゃなくて、考えるための高さでもあると思っていて。この作品以降、展示空間に制作台を使うことが増えました。これは作品用に作ったものですが、実際に制作台として使っているものを展示することもありました。

素材と向き合い、どう扱うか思考を続ける栗木は、「身近にある焼き物の中にシンプルな日本人の精神性、自分らしさを感じる」という。2024年11月に「DiEGO Omotesando」と「TAKU SOMETANI GALLERY」で展示を行う。

「もっと自由でいい」と絵があったから気づけた

石　どうして作品の中に、2枚のキャンバスの絵を入れようと思ったんですか。

栗　僕は当時、新制作協会の会員だったので、国立新美術館の決まった区画をある程度自由に使うことができました。彫刻部に絵を持ち込んだのは僕が初めてだったようで賛否両論でしたね（笑）。日進市の「ギャラリーM」などで個展をすることで、改めて展示空間について考えるわけですよ。自分ができるのは、「立体である、ものを置く、壁にかける」。場所を使って、自分が作った立体・平面・ドローイングという3つの要素で空間を表現する可能性。自分が彫刻するということはこういうことなんじゃないかなと思い始めたのはそのときです。

石　絵はずっと描いていたんですか。

栗　もともと絵を描きたかったんだけど、僕には才能がないと思っていた。というのも、うちの奥さんが絵を描く人だから、「色感が悪い」とか、「コンプレックスに感じている部分を否応なしに突っ込んでくるんだよね。そもそも、ドローイングの意味を掴みきれていなくて。デッサンとドローイング、クロッキーとドローイング。それぞれ何が違うのか、ドローイングの意義をダイレクトに教えてくれたのが奈良美智くん。だんだん「いいね」と言ってくれることが多くなって、彼に見てもらったおかげでもっと自由でいいんだと気づくことができました。最近は、絵描きが描く絵と自分の絵は違っていいんじゃないか。絵は誰でも描けると開き直っています。

最終コーナーに差しかかった今、ナショナリティを感じるものへ

石　《Glove Stand》にはいろいろな思いが込められているんですね。彫刻についてはどのようにお考えですか。

栗　彫刻とは、カーヴィング、モデリング、カルチベーションから成り立っていると、師事している柳原さんから教わりました。特にカルチベーションの語源が気になっていて、僕は「絶えず自分をどうリニューアルするか」だと理解しています。農業（アグリカルチャー）は作物を育てるために土壌を耕す。実は社会もそうなんだよね。僕たちの世代が次の世代に何を残すか。そういうことを繰り返すことが文化である。それを彫刻でも考えるべきなんです。ヨーロッパの作家たちが彫刻を論理の一つとして受け入れ、新しい世界を生んでいくように。

石　今年11月に東京での展示を控えていらっしゃいますが、栗木さんの作品はどうリニューアルされていくのでしょう。

栗　ヨーロッパに行くと絶えず聞かれるのが、日本人特有のナショナリティは何か。彼らはそのアイデンティティや美意識に影響されたいと思っている。だから、自分のナショナリティが何なのかっていうのは今もずっと考えているし、それが作品の中に出ればいいなと思っています。ナショナリティを感じるものの一つにおにぎりがあります。僕が握ると、みんなが口を揃えて「おいしい」と言って食べてくれるんだよ。おにぎりって、手の中で包み込むじゃないですか。その形を自分なりの大きさに拡大したら、そのものの存在はどう見えるのかというのがずっとあって、今それを形にしています。生涯彫刻家として駆け抜けてきた道のりも、いよいよ最終コーナー。手の中にあるフォルム感が最終形になっていきます。

MORE MUSIC

劇場と音楽

街とつながるコンサートホール

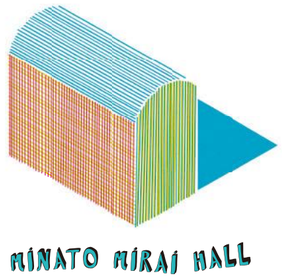
横浜みなとみらいホールが結ぶ音楽と社会

2020年4月7日、東京・神奈川をはじめ7都府県に「緊急事態宣言」が発令されました。初めて耳にするこの物騒な言葉。私が横浜みなとみらいホール※の館長に就任してわずか6日後のことでした。ホールは閉鎖、演奏会やイベントは中止、オーケストラや合唱など人が集まる音楽活動はすべて禁止。私はコンサートのできないコンサートホールの館長となってしまったのです。

「ときめく音楽を海の見えるホールから」。これは横浜みなとみらいホールが掲げるスローガンですが、ホールの窓から見える横浜港こそは、日本で初めて新型コロナウイルス感染症が発生した「ダイヤモンド・プリンセス号」の停泊していた場所でした。未知なるパンデミックの恐怖におびえながら、「音楽の歩みを止めてはいけない」と自らの気持ちを鼓舞するものの、なす術もなく途方に暮れるばかり。

今思い返すと、なにをどのように始めたのか覚えていないほど後先も考えず走り出し、まずインターネット上に当ホールの仮想空間をつくり、さまざまなコンサートが繰り広げられるバーチャルな音楽フェスティバル「横浜WEBスタジオ」を立ち上げました。演奏のインターネット配信がまだ一般的でなかったコロナ禍の最初期に、みなとみらいホールはいち早く、360度カメラやドローンを使ったユニークな演奏映像のコンテンツを大量に制作・配信し、バーチャルなクラシック音楽会の先駆けとなりました。視聴数は約4百万という記録的な数字に上り、今もなお視聴数が伸びています。

その後ホールは大規模修繕工事による長期休館を経て、22年10月にリニューアルオープン。しかしここからが波乱続きでした。オープン直前にスプリンクラーが誤作動し、2020席の大ホールの1階客席が水浸しになる事故に見舞われたのです。再開日を延期し、ようやく今度こそオープンにこぎつけた時、またもや大きな不具合が発覚。改修工事で2・3階バルコニー席に新しく設置された落下防止網棚が舞台への視界をひどく遮ることが判明し、お客さまからのクレームにより公式X（旧Twitter）が炎上。皮肉にも「みなとみらいホール」がトレンドワードに上がるほど〝有名な〟ホールになってしまいました。



危機に直面した時、それを乗り越えられるか否かは、劇場がいかにその地域に根付いているか、その街の人々とつながっているかにかかっています。そもそも諸事件の原因は、行政と公共ホール、施設のハード面とソフト面、利用者と管理者とのコミュニケーションをこれまで怠ってきたことによるものでした。立て直すには、地道に誠意をもって行政と公共ホールが一枚岩となり、お客さま一人ひとりに粘り強く説明していくしかありません。リニューアルオープンから約2年間は、公演事業そのものよりも、施設の改善策とお客さまとの信頼関係を回復することに明け暮れました。

そのなかで確かな手応えとして感じたのは、みなとみらいホールは、横浜市民の「地元愛」に支えられているということでした。クラシック音楽専用のコンサートホールは、ともすれば市民生活とは無縁の、孤高の芸術空間といったイメージになりがちです。しかし、みなとみらいホールの音楽は、市民の生活と「地続き」の場所に在るものだったのです。それは当ホールが1998年の開館以来、横浜市立の小学校・支援学校の児童生徒を招待するオーケストラ鑑賞教室の開催をはじめ、次世代育成やインクルージョン事業に力を注いできた長年の積み重ねによるものでした。

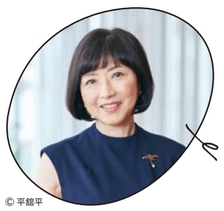
例えば、市内の中学生たちに、コンサートの企画、構成、運営、広報などを任せる「中学生プロデューサー」プロジェクト。これは、約1年にわたってプロのプロデューサーから中学生たちがプロデュース業務をしっかり学び、公演事業を制作するというものです。プロデューサーを経験した中学生たちが、卒業後にコンサートの観客やスタッフとして再びホールに戻ってくるという循環が作られています。

またインクルージョン事業では、重度障がいのあるピアニストのために開発された1本指で弾ける自動伴奏機能付きピアノ「だれでもピアノ®」を使って、高齢者を対象に「だれでもピアノ」の定期的なレッスンを行っています。ここでは幸福度や自己効力感の向上や認知機能低下の予防への効果検証を医学大学との共同研究により進めています。

質の高い芸術音楽を提供することと市民の皆さんとつながること。これを両立するのは簡単なことではありません。クラシック音楽の敷居を下げるといった表面的な方法ではなく、音楽をハブとして誰もが社会に参加できるような仕組みをホールの中につくりたいのです。

「音」は、人に奏でられ、人に聴かれることによって初めて「音楽」になる。人と人との間に音楽があり、心と心がつながったとき感動が生まれます。横浜みなとみらいホールの未来に、どうかご期待ください。

※横浜みなとみらいホール　横浜市営で唯一のクラシック音楽専用コンサートホール。


© 平館平

新井鷗子　横浜みなとみらいホール館長

東京藝術大学音楽学部作曲科卒業。構成作家として「題名のない音楽会」などの構成を手がける。東京藝大でインクルーシブアート研究に携わり、1本指で弾ける楽器「だれでもピアノ®」を開発。東京藝大客員教授。

アートライブラリーには新井氏執筆による著書も所蔵あり！

スタッフのオススメ関連本！

ART LIBRARY

ひとさし指のノクターン　車いすの高校生と東京藝大の挑戦
新井鷗子、高橋幸代／著
ヤマハミュージックメディア、2016.12、平館平／表紙写真

4人の障がいのある高校生が本物のピアノでショパンを弾くまでを追った書籍。研究の始まりからステージ当日までを、全9章のドキュメンタリー形式で記録した充実の構成。

愛知芸術文化センター管理課 アートライブラリー担当
三上昂良

navigator's COLUMN

国際芸術祭「あいち2025」のキュレーターやスタッフがナビゲート。アートの多様性を「あいち」から発信します。

今回ご紹介する地域展開事業は、国際芸術祭「あいち2025」に先駆けて、やきもののまち・瀬戸で開催される国内外の若手アーティスト10名による現代美術の展覧会です。テーマは「底に触れる」。アーティストたちの多様な活動を、普段は何気なく触れる茶碗の底を意識させたり、見えない壺の底を覗き込む行為になぞらえてご紹介します。歴史ある瀬戸のまちなみなどで、どのような作品が展開されるのかぜひご覧ください。また、会期中はさまざまな関連プログラムを開催しますので、そちらもお楽しみに。

国際芸術祭「あいち2025」キュレーター　**入澤聖明**（愛知県陶磁美術館学芸員）

2024年10月12日（土）～11月4日（月・振休）
国際芸術祭「あいち」地域展開事業
「底に触れる　現代美術 in 瀬戸」
場所／名鉄瀬戸線「尾張瀬戸」駅周辺のまちなか
料金／観覧無料